ついて形の面白さや不思議な生態を知っているものの，魚体の大きさがイメージできない人が予想以上に多い．深海魚に興味のある人は定規片手に本書で体の大きさについても是非感じてもらいたい．

本書は2つの章，さらに第2章は11の項目（発光，発音，発電，摂餌，感覚，運動，繁殖，防御，色彩，体形および利用）から構成される．「感覚」の「長い柄の先に眼」において，ミツマタヤリウオの特異な形態の仔魚を例にあげ，「視野が著しく広がり，捕食者や餌生物を容易に発見し，餌生物を長く眼で追うことができ，少ない動きで確実に捕らえられます．余分な動きを少なくすることで捕食者から発見され難いです．有柄眼は餌が少ないところで役立ちます」と紹介している．これはWeihs and Moser (1981)の仮説の要点で，彼らは数式を使ってこの説を唱えた．しかし，彼らの目的は新たな仮説をだして深海魚の生態学の分野を刺激することでもあった．生きている個体で観察されたわけではないことを読者は知るべきだろう．そういえばごく最近，筒状で上向きの眼をもち，かつ「おちょぼ口」の深海魚で有名なデメニギスの生態に関する論文が発表された(Robison and Reisenbichler, 2008)．この種では眼の方向（上）と口の方向（前）が合っていないため，餌をどのように摂食するのか疑問視されていた．眼と口がほぼ直角の位置関係に常時あるという「思い込み」がこのパラドックス説の発端である．事実は眼が前方に可動し，口と同じ方向を向くらしい（論文で使われた生態写真と簡単な解説はナショナルジオグラフィック日本語版2009年8月号の記事にもある）．本書には（おそらく印刷の関係で）このデメニギスの新知見は紹介されていない．しかし，随所に未知の領域があることを再認識させてくれる貴重な1冊である．淡水魚・浅海魚の生態学，行動学，生理学等の研究者や院生にも本書を読んでもらい，研究テーマのタネ（もしくはネタ）を見つけて欲しいと感じる．

引用文献

Robison, B. H. and K. R. Reisenbichler. 2008. *Micropinna micropinna* and the paradox of its tubular eyes. Copeia, 2009: 780–784.

Weihs, D. and H.G. Moser. 1981. Stalked eyes as an adaptation towards more efficient foraging in marine fish larvae. Bull. Mar. Sci., 31: 31–36.

（篠原現人　Gento Shinohara：〒169–0073　東京都新宿区百人町3–23–1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: s-gento@kahaku.go.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
56(2): 181

稚魚　生残と変態の生理生態学．—田中　克・田川正朋・中山耕至（著）．2009．京都大学学術出版会，京都．viii+387 pp. ISBN978-4-87698-774-0，3,800円（税別）．本書は3部から構成される．第1部「試練を越えて稚魚へと“変態”」では，初期減耗，変態，生育場，輸送と接岸が，第2部「食べて食べられ…：摂食と被食の間の生き残り」では，摂食，被食，学習と適応，DNAの利用，食物連鎖，資源変動，環境収納力が，第3部「人の暮らしと稚魚の叫び」では，栽培漁業，地球温暖化，環境問題，稚魚研究のあり方，森里海連環学が論じられている．以上から明らかなように，本書の特色はその網羅性にある．さらに最新の研究が数多く引用されているので，各分野での研究の進展を知るうえでも有用である．学部あるいは修士レベルでの教科書や副読本としての利用にも適している．（佐々木邦夫）

Early life history of marine fishes. —B. S. Miller and A. W. Kendall, Jr. 2009. University of California Press, Berkeley and Los Angeles. xii+364 pp. ISBN978-0-520-27972-1．本書は魚類の初期生活史にまつわるトピックスを広く取りあげている点で，教科書的といえるだろう．その一方，研究の実践を強く意識した内容にもなっていて，実務家が必携のハンドブックとしての性格も色濃く漂う．卵や仔魚をあつかった章では，同定方法に多くのページがさかれ，これらの発育段階での分類形質について詳しく説明されている．「Sampling fish eggs and larvae」では，様々な稚魚ネットが図示され，それぞれの特性が述べられている．さらに巻末の「Laboratory exercises」なる別項には，仔魚の飼育方法や透明骨格標本の作製法など12のイクササイズ（技法）の解説が含まれる．海産仔稚魚の研究者にとって，得るところの多い1冊であろう．約1万円で入手できる．（佐々木邦夫）

Oceanic anglerfishes–Extraordinary diversity in the deep sea.–T. W. Pietsch. 2009. University of California Press, Berkeley and Los Angeles. xii+557 pp. ISBN978-0-520-25542-5. $ 85.00 US. チョウチンアンコウ亜目の生物学の総説である．本書は研究史，形態学的特徴，種多様性，系統進化，生物地理，発光と疑餌状体（ルアー），遊泳と摂餌，繁殖と初期生活史の8章からなる前節 (Part 1) と分類を集約した後節 (Part 2) から構成される．著者は*Ichthyological Research*でチョウチンアンコウ亜目の繁殖や性的二形に関する総説を発表しているが（52巻3号），本書では白黒写真で印刷された総説論文の標本写真がすべてカラーでみられる．前節の各章には標本写真の他，線画，図，生態写真なども掲載され，それぞれのトピックの記述も簡潔で読みやすい．また後節は，本書の約5分の2を占め，分類体系，検索表，分類群の表徴形質，シノニム，記載，備考が掲載されており，この部分をみれば分類の概要から詳細，さらに進捗状況がわかる．巻末の10頁にわたるシノニム関係の閲覧表（全ての名義種の分類学的位置の変更や維持）は，チョウチンアンコウ亜目の学名を扱う研究者に有用である．堂々たるボリューム（縦28.5 cm×横22 cm×厚さ4 cm）かつハードカバーの本であるにもかかわらず比較的廉価であるのも嬉しい．（篠原現人）